学びや タイムスリップ

㊲ 紫式部を描いた絵画 （大正時代～）

子どもの学業成就願い

『源氏物語』を書いたことで知られる紫式部は、文道に秀でた人物として昔から尊ばれてきました。京都の学校では、子どもたちの学業成就を願って、紫式部の肖像や源氏物語の一場面を描いた絵画が多く飾られてきました。京都に住む画家たちが腕を振るった、それらの作品が現在も伝えられています。

下京区の成徳中（現在は下京中に統合）には、大正から昭和期にかけて活躍した中村大三郎が手掛けた紫式部の図（写真1）が残されていました。中村大三郎は中京区の明倫小の出身で、優美な人物画を得意とした日本画家です。本作でも流麗な線を用い気品に満ちた姿で、理知的なまなざしが印象的です。同じく学者の手本とされた菅原道真の肖像とともに寄贈されました。

他に、東山区の新道小（現在は開睛小・中に統合）には昭和に活躍した勝田哲の作品があります（写真2）。文机（ふづくえ）に向かう紫式部の姿が、学校の机に向かう子どもたちの姿に重ねられていたのでしょうか。サイズも幅1㍍以上ある大きな絵で、学校の中にあって遠くからでもよく見られるようになっていました。

小学校に通う子どもたちの中で、紫式部が尊敬されてきた背景には教科書の存在があります。紫式部は明治時代から多くの修身教科書に登場します。幼少期に兄が書を読んでいるのを隣で聞き、すべての内容をそらんじてみせたという逸話の紹介などを通じて、幼いころより才覚に優れ、成長しては広く和漢の学を修めた学者であったと教えていました。そうやって、子どもの時に努力することの大事さを伝えていたのです。

下京区の開智小（現京都市学校歴史博物館）で学んだ上村松園にとっても紫式部は身近な偉人でした。歴史人物は心の友であるとし、紫式部の姿も描いています。

（京都市学校歴史博物館学芸員　森光彦）

写真1、中村大三郎「紫式部」（大正～昭和期、元成徳中蔵）

写真2、勝田哲「紫式部之図」（昭和期、元新道小蔵）